

斜里町以久科北海岸遺跡測量調査第 1 次報告

加藤博文¹・松田 功²・木山克彦¹・布施和洋¹

1. 060-0810 札幌市北区北 10 条西 7 丁目, 北海道大学大学院文学研究科 2. 099-4113 斜里町本町 49-2, 斜里町立知床博物館

Preliminary Report of Recording and Mapping for Study at the Ikushina-Kita Kaigan Site, Shari, 2004 Field Season

KATO Hirofumi¹, MATSUDA Isao², KIYAMA Katuhiko² & HUSE Kazuhiro²

1. Graduate School of Letters, Hokkaido University, Sapporo, Hokkaido 060-0810, Japan. h-kato@let.hokudai.ac.jp 2. Shiretoko Museum, 49-2 Honmachi, Shari-cho, Hokkaido 099-4113, Japan. isao-m@apost.plala.or.jp

調査に至る経緯

北海道大学大学院文学研究科では、文学部北方文化研究施設が斜里町に地元斜里町の協力と援助を受けて斜里分室を設置して以来、知床半島部の

調査研究を実施してきた。その後、大学院大学への組織変革を受けて北方文化研究施設が北方文化論講座へ移行した後は、大学院文学研究科斜里研究室と改称され、本施設を活用した教育プログラ

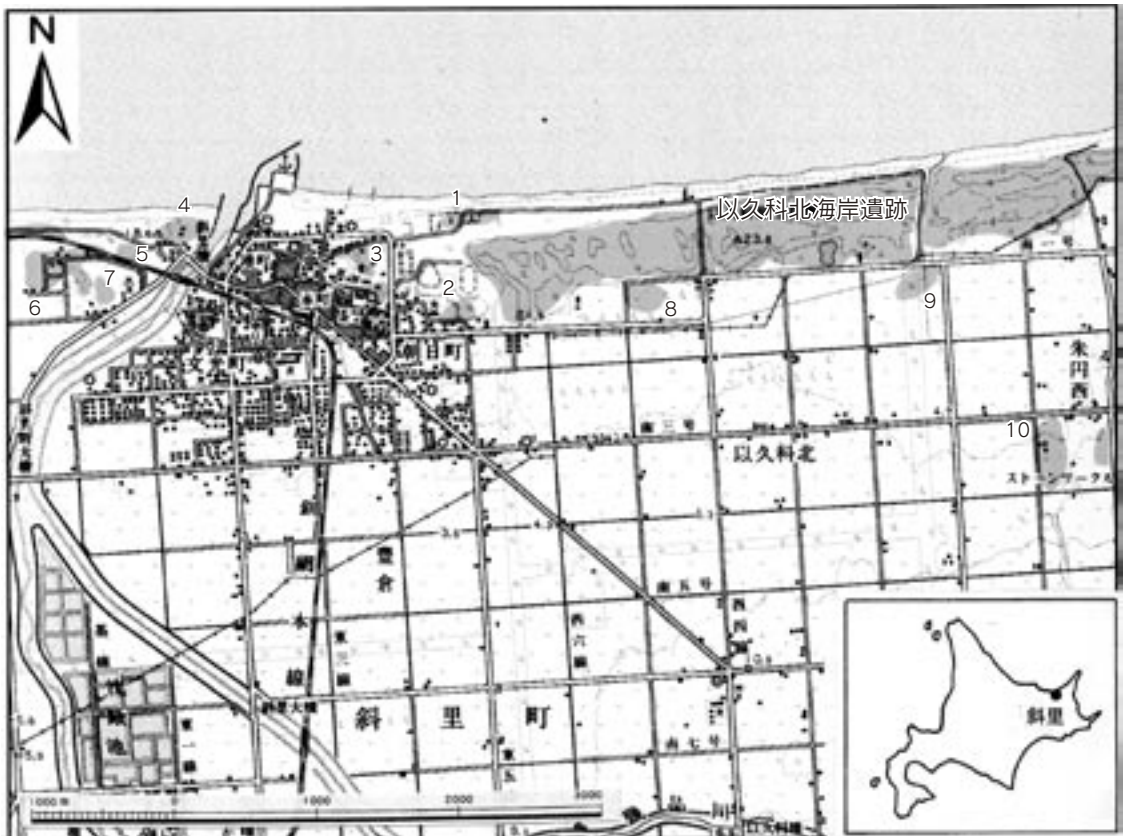


図 1. 以久科北海岸遺跡の位置. 1: タネウシ貝塚. 2: 貯木場遺跡. 3: 禅龍寺遺跡. 4: クシュコタン遺跡. 5: ウエンベツ河口遺跡. 6: ピラガ丘遺跡. 7: 須藤遺跡. 8: 尾河台地遺跡. 9: 谷田遺跡. 10: 栗沢台地遺跡.

ムの展開を計画してきた。平成15年度からは、具体的な教育プログラムの実施を斜里町および斜里町立知床博物館と協議した結果、平成16年度から全学教育プログラムの一環としての野外実習を斜里町域において実施することとなったものである。

実習の第一段階としては、斜里平野海岸地域に分布する砂丘上の堅穴群の詳細地形測量と各堅穴群の帰属時期の確認を目標とした調査を北海道大学大学院文学研究科と斜里町立博物館と共同で実施することとした。

また平成16年度には、この教育プログラムを含んだ北方地域環境科学教育プログラムが平成16年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択され、実習による調査成果は「博物館を核とした知床学」教育プログラムとして公開されることも確定している。本報告は、上記の経緯を経て平成16年度9月に北海道大学全学教育プログラム一般教育実習科目として実施した第一次調査の概要報告である。

なお調査の実施にあたっては、北海道森林管理局網走南部森林管理所には国有林内への立ち入りと調査活動を許可いただいた。感謝申し上げる。

遺跡の概要

平成16年度の実習地となった以久科北海岸遺跡（北海道教育委員会登録番号:I-08-041）は、斜里町字以久科地先国有林142林班に位置する砂丘上に形成された遺跡である（図1）。遺跡の位置する砂丘は、斜里平野の海岸沿いに形成された6列の砂丘列のうち砂丘Ⅰに属し、東西方向に長軸をもつ砂丘に斜行する北西—南東方向に長軸をもつ谷や尾根が形成されている。砂丘の規模は大規模で幅も300-600mを有し、標高も10mから30mにわたり起伏に富んでいる。

遺跡の西端には、アイヌ文化期のガッタンコ1チャシおよびガッタンコ2チャシが位置し、砂丘北側の海岸線沿いの低地にはガッタンコ貝塚が位置する。以久科北海岸遺跡は、先述のアイヌ期のチャシコツ（チャシ跡）から西方に確認される堅穴群を中心として遺跡領域が想定されている。これまでの資料に基づいた遺跡の時期は縄文からアイヌ期におよぶ複合遺跡と理解されている。

調査の目的

北海道大学文学研究科北方文化論講座と斜里町立知床博物館は、平成16年度から共同で斜里平野海岸部から知床半島部にかけての先史遺跡の全般的な共同調査を行うこととした。平成16年度は、北海道大学全学教育一般教育演習の一環として野外実習を斜里町で実施することが確定したことを受けて、具体的な調査地を斜里町教育委員会とも協議した。その結果として斜里市街地東部に位置し、遺跡の全容が未だ未解明であり、大規模な集落遺跡の可能性をもつ以久科北海岸遺跡の詳細地形測量を実施することとなった。

調査の目的としては、（1）全容が未解明の堅穴群の確認、（2）周知の堅穴群の周辺地形の測量、（3）砂丘内部の起伏に富んだ谷や尾根の詳細地形測量と堅穴群などの遺構の分布域との相関関係の把握、（4）堅穴群の帰属時期の確定という諸項目を設定した。調査機関は複数年次にまたがる長期的なものとなると想定しているが、最終的には遺跡の全容の把握と遺跡周辺地形の詳細測量図の作成を予定している。

調査体制

平成16年度の調査は、北海道大学と斜里町立博物館との共同調査であることに加えて、北海道大学大学院文学研究科が主催する全学教育カリキュラム一般教育演習として実施することから、次のような体制で実施した。

調査主体者:新田孝彦（北海道大学大学院文学研究科長）

調査担当者:加藤博文（北海道大学大学院文学研究科・助教授）、松田功（斜里町立知床博物館・学芸員）

調査参加者:木山克彦、鈴木建治、竹内亮介、青木夏美、布施和洋（以上北海道大学大学院生）、帰山真一、権平拓也、虎尾匡、伊東正樹、岩田愛子、加藤節子、小林祥子、樋口正輝、内田真生、草刈大、浦田格、花井みき、高畠容子、置田美幸、古松朋子、宮垣梓（以上北海道大学学生）

調査の概要

平成16年度は、遺跡の西側に所在する堅穴群（以下堅穴Ⅰ群と呼称）と谷を挟んで東側に所在する堅穴群（以下堅穴Ⅱ群と呼称）の周辺地形の測量、

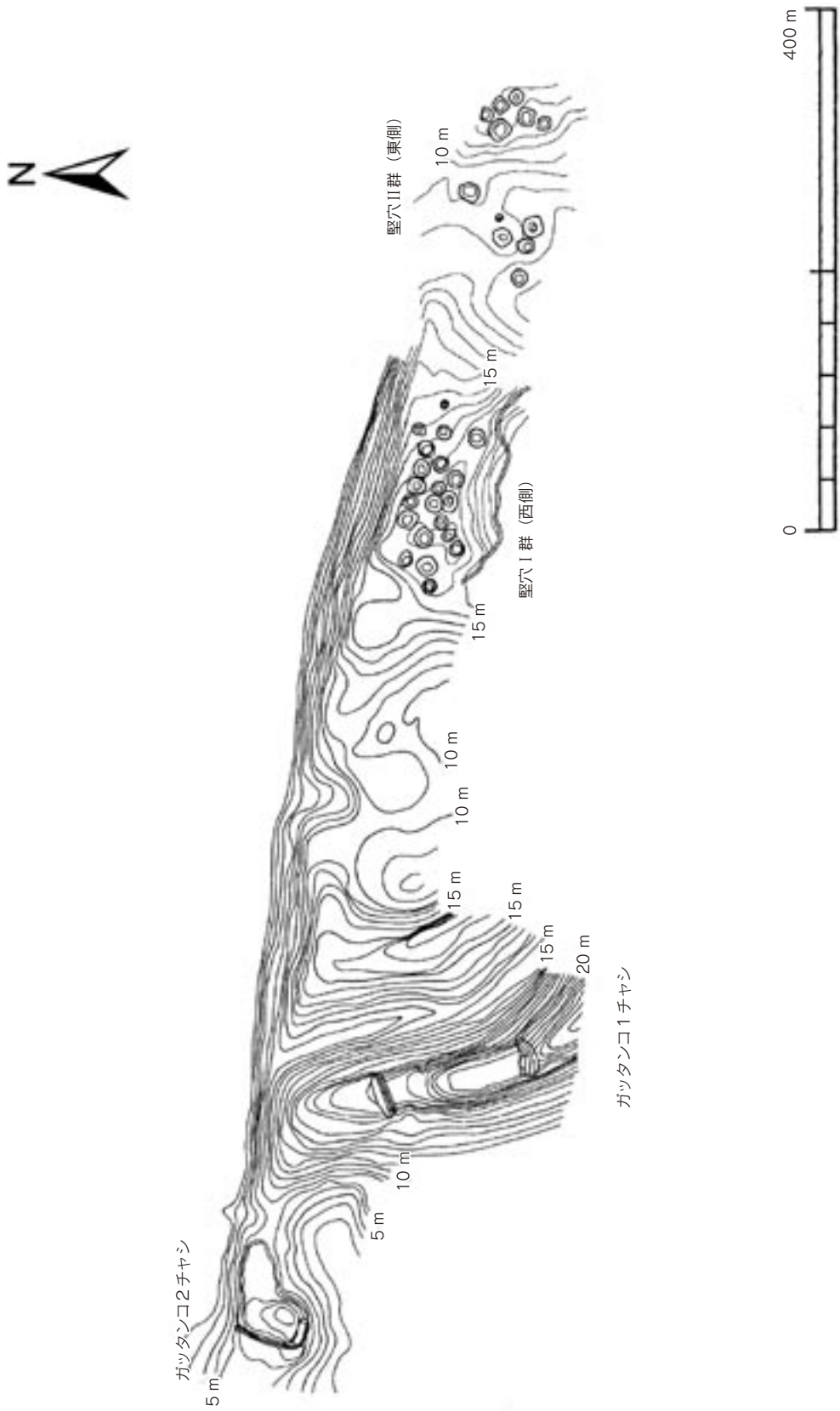


図2. 地形測量図.

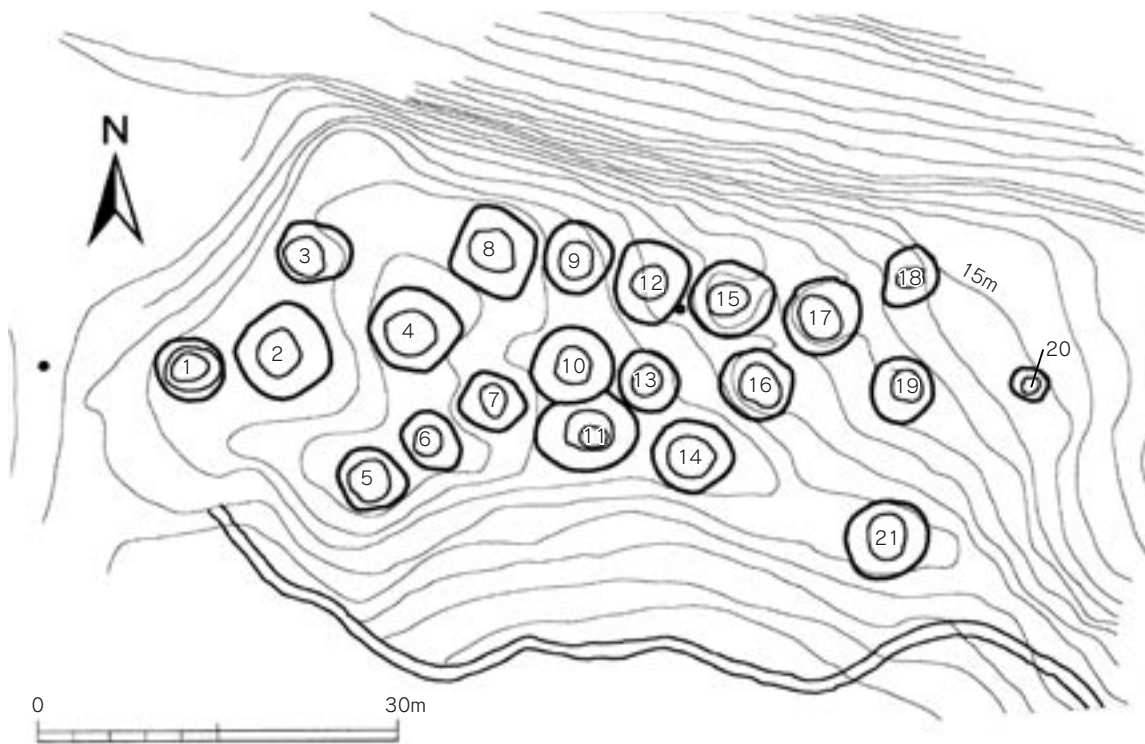


図3. 竖穴群測量図 (竖穴I群).

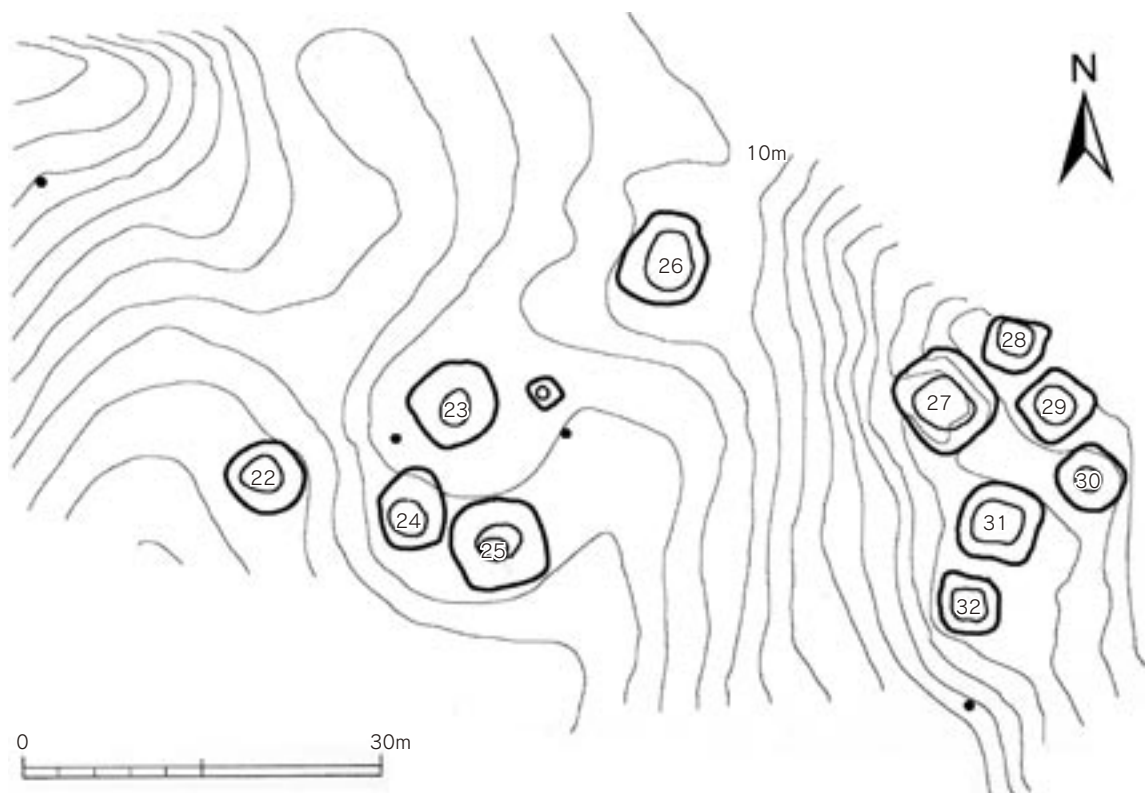


図4. 竖穴群測量図 (竖穴II群).

および竪穴Ⅰ群帰属時期を確定するための試掘による時期確認調査を行った。

竪穴群については、ガッタンコチャシコツ側の西側より地表面から窺みとして確認できる竪穴に個別に番号を設定した。竪穴番号は竪穴Ⅰ群およびⅡ群とも共通の通し番号である。今年度の段階で竪穴群ごとに確認された件数は、竪穴Ⅰ群において21軒、竪穴Ⅱ群において12軒である。

竪穴Ⅰ群における試掘調査は、個々の竪穴の内部壁ぎわに1m×2mの試掘区を設定し、竪穴内部の覆土の堆積状況と出土遺物を確認した。平成16年度に試掘が行われた竪穴は竪穴Ⅰ群を構成する21軒のうち、1号竪穴から4号竪穴までの4軒である。

成果

1) 測量調査

遺跡の地形測量は、大学の授業の一環という性格もあり、個々の竪穴の地形測量は平板を用いて100分の1の平面図を作成した。竪穴Ⅰ群の周辺地形

は、斜里町教育委員会により既に平板測量が行われていたため、今年度実施した平板測量は竪穴Ⅱ群についてである。また50m離れた竪穴Ⅰ群と竪穴Ⅱ群間の谷部の地形測量と基準杭の設定に関しては、トータルステーションを利用している。

作図については、平板測量により作成された測量図はスキャナで読み込み、デジタルデータとつなぎ合わせて地形図に組みこんだ。トータルステーションによる地形測量で得られた任意の地形ポイントはGIS（地理情報システム）上でTin（不規則三角形網）に置き換え、そこから等高線を作成した。その後、基準点を用いて地図の位置を合わせ、平板測量により作成された図面と組み合わせて最終的にデジタルトレースを行って作成した（図2-図5）。

詳細な座標については、傍に電子基準点（6544-65-9402）が設定されており、北緯43° 54' 56" .4665、東経144° 40' 33" .0359を示している。次年度以降は遺跡全体の座標との一致を計る予定である。

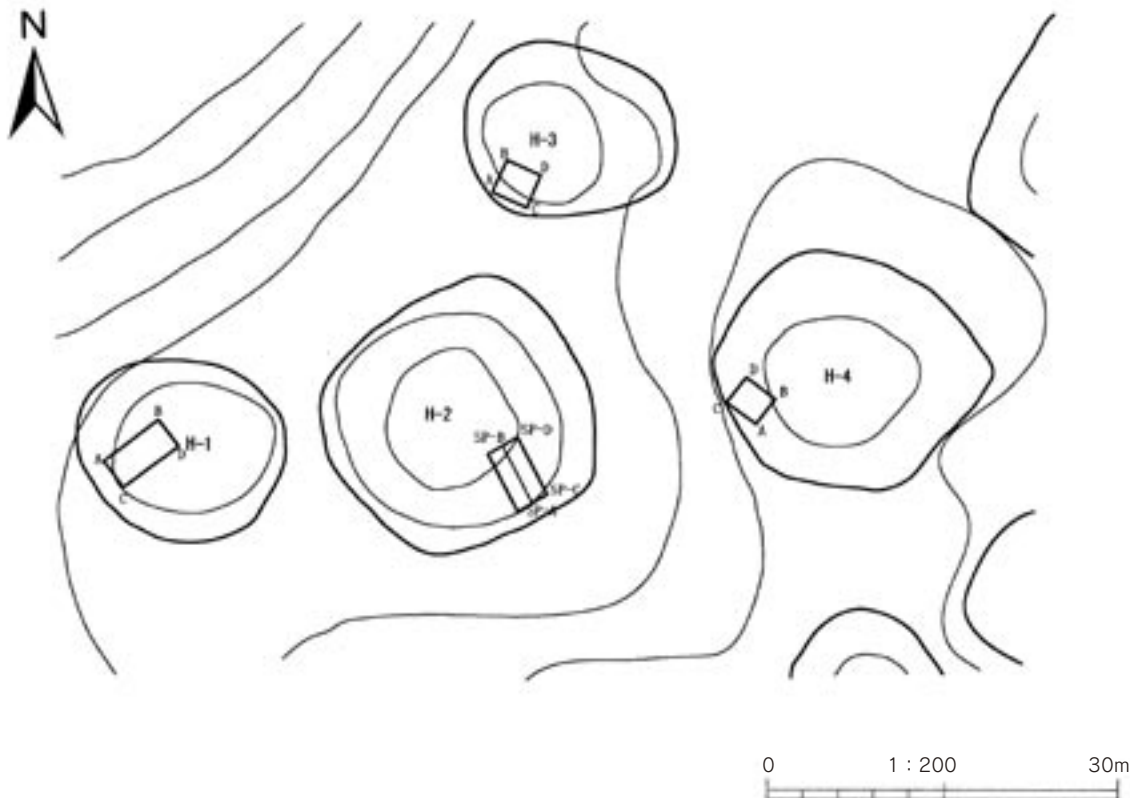
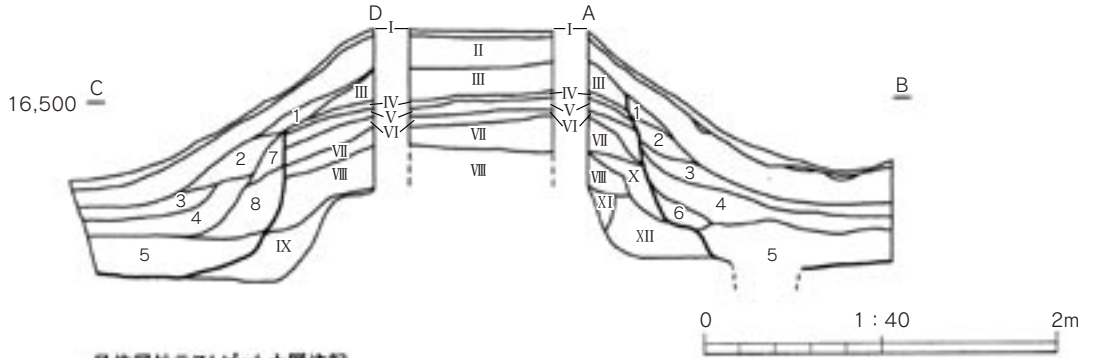


図5. 竪穴Ⅰ群試掘図配置図。



一号住居址テストピット土層注記

I	黒褐色	2.5Y3/2	粘性やや無し	しまりやや無し	表土
II	黒褐色腐植土	10YR2/3	粘性やや無し	しまりやや強い	近世アイヌ期文化層
III	暗褐色砂	10YR3/4	粘性やや無し	しまりやや弱い	
IV	黒褐色腐植土	10YR3/2	粘性やや有り	しまりやや無し	縄文・トピニタイ文化層
V	黄褐色パミス	2.5Y5/3	粘性無し	しまり弱い	Ma-b5
VI	暗褐色腐植土	10YR3/3	粘性やや有り	しまりやや強い	Ma-b5が多少混入
VII	褐色砂	10YR4/4	粘性やや無し	しまりやや強い	
VIII	褐色砂	10YR4/5	粘性やや無し	しまりやや強い	鉄分を含む
IX	灰オリーブ砂	5Y4/2	粘性無し	しまり強い	鉄分を含む
X	黒色砂	10YR2/1	粘性やや有り	しまりやや強い	
XI	暗オリーブ砂	5Y4/3	粘性無し	しまり強い	鉄分を含む
XII	灰オリーブ砂	5Y4/1	粘性無し	しまり強い	鉄分を含む

1	黒褐色腐植土	10YR2/2	粘性やや有り	しまりやや強い	
2	黒褐色腐植土	10YR2/3	粘性やや有り	しまりやや強い	
3	黒褐色腐植土	10YR3/2	粘性やや有り	しまりやや強い	
4	黒色腐植土	10YR2/1	粘性やや有り	しまりやや強い	
5	褐色砂	10YR4/4	粘性無し	しまりやや強い	
6	鈍い黄褐色砂	10YR4/3	粘性無し	しまりやや強い	
7	褐色砂	10YR4/4	粘性無し	しまりやや弱い	Ma-b5/ピスの流れ込み見られる
8	黒褐色腐植土	10YR3/1	粘性無し	しまりやや弱い	

図6. 1号住居址試掘区土倉断面図.

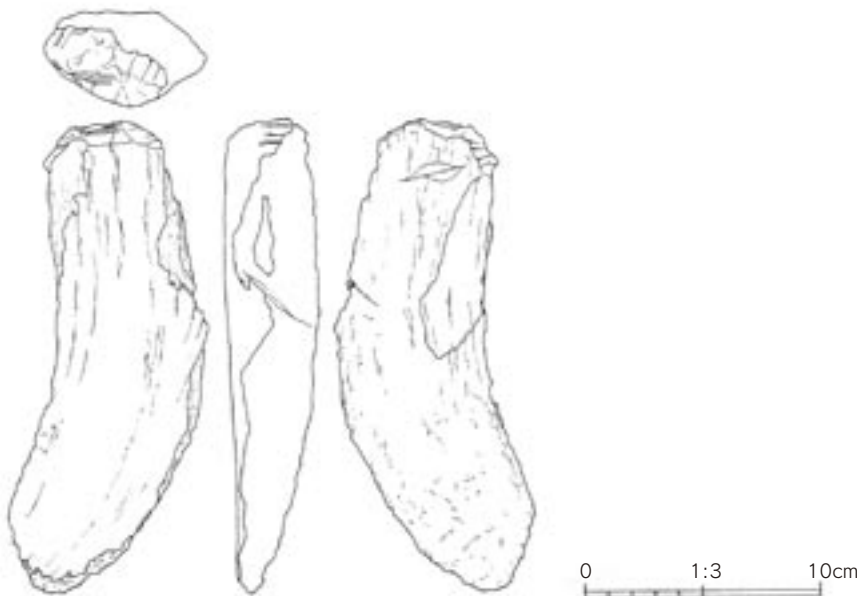
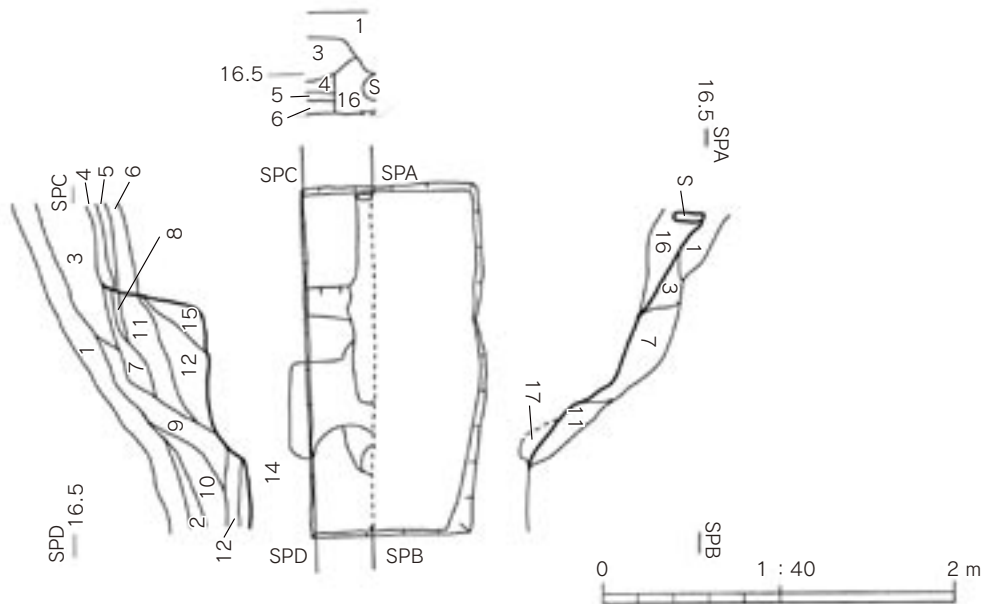


図7. 1号住居址出土骨角器未製品.



二号住居址テストピット土層注記

1	黒褐色	2.5Y3/2	粘性やや無し	しまりやや無し	表土
2	黒褐色砂	10YR3/1	粘性無し	しまり無し	Ta-a
3	褐色砂	10YR4/4	粘性無し	しまり無し	
4	黄褐色/バミス	2.5Y5/3	粘性無し	しまり弱い	Mab-5
5	灰黄褐色砂	10YR4/2	粘性無し	しまり無し	
6	褐色砂	10YR4/6	粘性無し	しまり無し	細粒砂
7	鈍い黄褐色砂	10YR5/4	粘性無し	しまり無し	Mab-5湿じる
8	暗褐色砂	10YR3/3	粘性無し	しまり無し	Mab-5粒湿じる
9	黄褐色砂	10YR5/6	粘性無し	しまり無し	
10	灰褐色砂	10YR4/2	粘性無し	しまり無し	
11	褐色砂	10YR4/6	粘性無し	しまり無し	
12	鈍い褐色砂	10Y5/3	粘性無し	しまり無し	
13	暗褐色砂	7.5YR3/3	粘性無し	しまり無し	
14	褐色砂	7.5YR4/6	粘性無し	しまり無し	
15	鈍い褐色砂	10YR4/3	粘性無し	しまり無し	
16	黄褐色粘土	2.5Y5/3	粘性強い		
17	鈍い赤褐色砂	5YR4/4			

被熱によりカマド煙道内の堆積土強くしまる
やや赤みがかっているが比熱したため詳細不明

図8. 2号住居址試掘区土倉断面図(カマド部).

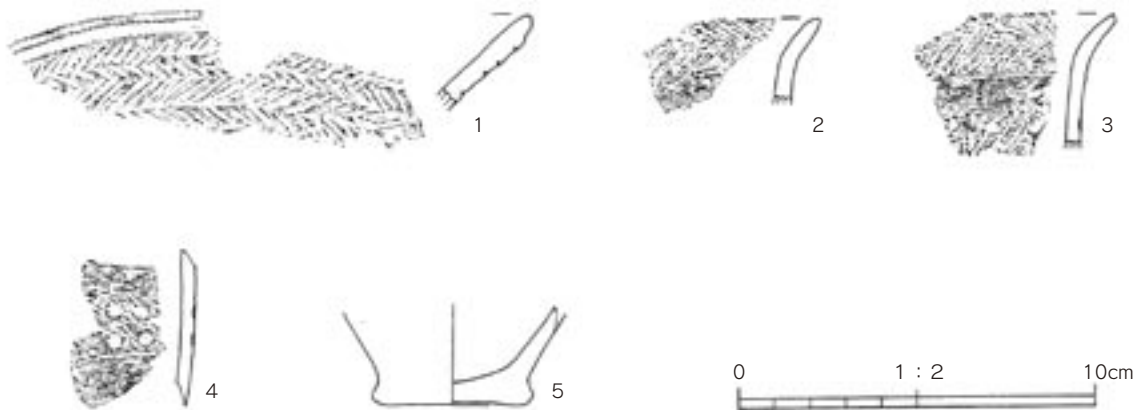


図9. 2号住居址出土土器.

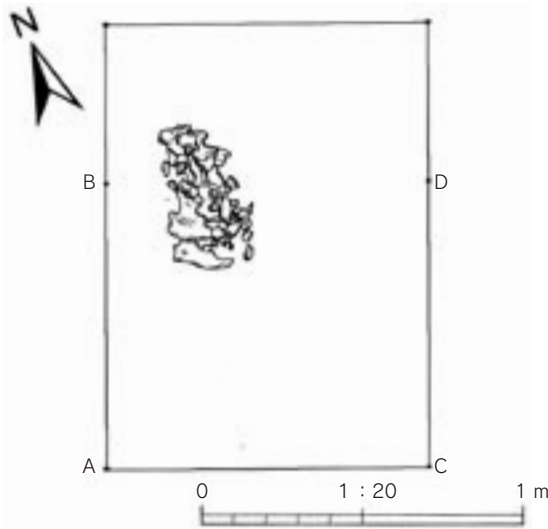


図10. 3号住居址覆土土上面出土ヒグマ頭蓋骨検出状況実測図。

2) 堅穴住居址からの出土遺物と堅穴の帰属時期について

①第1号住居址

第1号住居址は、径5mを計る。地表面より観察できる堅穴の窪みの形状および長軸方向を考慮し、堅穴の南西隅に1m×2mの試掘区を設定した。試掘区の土層断面からは、最初に構築された堅穴覆土を最低二度掘り込んだ痕跡を確認できる。ただし第1号住居の壁は本試掘区では捉えられていない。堅穴覆土中に観察できる火山灰は、上層より1739年に降灰したTa-a（山田 1958）、ca980の年代値が与えられているMa-b5（山田 1958、宮田ら 1988）を確認できる（図6）。

出土遺物としては、表土直下のTa-aの層準より出土した海獣骨製骨角製品の未製品が挙げられる（図7）。種や部位は未同定であるが、端部に金属器による切込み痕が確認できる。端部以外の部分に面取りや加工痕は見られない。出土層位から見て近世アイヌ期に属すると考えられる。

堅穴住居の構築の時期については、試掘区の土層断面よりMa-b5を掘り込んで構築されていることから10世紀後半以降に構築されたことは確実である。床面からの出土遺物がないため詳細な年代は確定できないがトビニタイ後期（大西 1996など）以降と見なすことができる。

②第2号住居址

第2号住居址は径7mを計る。試掘区は、第1号住居址同様に地表面から確認できる堅穴の窪みの形状および長軸を考慮して堅穴の南東隅に1m×2mの規模で設定した。

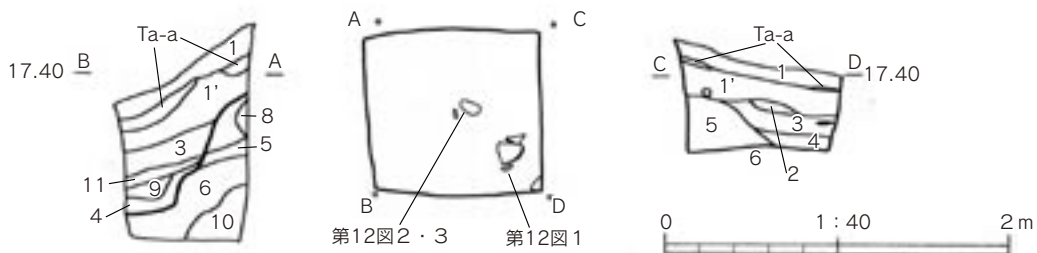
第2号住居址の試掘区は、ちょうどカマド部の長軸沿いに裁断する場所に設置されたことが調査を進める中で明らかとなった。カマドは、南東壁に構築されており、良好に残されている。試掘区では検出されたカマドを半裁せずにカマドの側面にあたる北側で住居壁を確認した。カマドにかかる南側は竈上面で掘下げをとめている。煙り出口には留石が検出され、炊き口付近は比熱し固くしまっている（図8）。

出土遺物としては堅穴覆土上部の2層から甕の口縁部破片が出土している（図9-1）。また堅穴床面近くの13層からは小型の甕の口縁+頸部破片2点（図9-2, 3）と胴部1点（図9-4）が出土している。

堅穴住居の時期としては、試掘区の土層断面より堅穴がMe-b5を切って構築されたことが明確である。また覆土出土土器の特徴から見ると2層から出土した図9-1の土器破片は、内面を入念に横位のミガキにより器面調整されており、外面派口唇直下に横走沈線を施し、その下位に綾杉文が施されている。一方カマド焚き口近くの13層より出土した小型甕の破片は、器面状態が粗く、ケズリもミガキの入念ではない。また胴部は山形に沈潜を施し、それに沿って刺突を加えている。これらの特徴からトビニタイI型と見てよい。このように堅穴覆土と火山灰との層位的関係および出土土器から見て堅穴住居の構築時期は10世紀以降であり、トビニタイI型を伴う段階の住居と見なしうる。

③第3号住居址

第3号住居址は、第2号住居址の北側に位置する小型の堅穴住居址であり、5mを図る。試掘区は、堅穴の窪みの南側に1m×1mで設定し、後に南北方向に50cm拡張した。表土を除去した段階、Ta-a直下でヒグマの頭蓋骨の集中が確認されたため、これを図化して取り上げた（図10）。以下掘り下げを行っていないため堅穴住居の構築時期は未確認である。出土したヒグマの頭蓋骨については、後述してあるように慶応義塾大学文学部の佐藤孝雄助教授に所見を依頼した。このヒグマの頭蓋骨は、



四号住居址東壁テストピット土層注記

1	黒褐色砂	10YR3/1	粘性無し	しまり無し	所々にTa-a混入
1'	黒褐色	2.5Y3/2	粘性やや無し	しまりやや無し	
2	明黄色砂	2.5YR6/6	粘性無し	しまり無し	粒子極めて細かい
3	褐色砂	10YR4/6	粘性無し	しまりやや有り	粒子極めて細かい 整穴埋土
4	黄褐色砂	10YR5/8	粘性無し	しまりやや有り	粒子極めて細かい
5	黄褐色砂	10YR5/6	粘性無し	しまりやや有り	
6	黄褐色砂	2.5Y5/6	粘性強い	しまり強い	
7	褐色砂	10YR4/4	粘性無し	しまり無し	
8	黄褐色パミス	2.5Y5/3	粘性無し	しまり弱い	Mab-5
9	褐色砂	10YR4/6	粘性無し	しまりやや有り	
10	暗灰黄色砂	2.5YR5/2	粘性無し	しまりやや有り	
11	黄褐色砂	10YR5/6	粘性無し	しまりやや有り	

四号住居址西壁テストピット土層注記

1	黒褐色砂	10YR3/1	粘性無し	しまり無し	所々にTa-a混入
1'	黒褐色	2.5Y3/2	粘性やや無し	しまりやや無し	
2	明黄色砂	2.5YR6/6	粘性無し	しまり無し	
3	褐色砂	10YR4/6	粘性無し	しまりやや有り	粒子極めて細かい
4	黄褐色砂	10YR5/8	粘性無し	しまりやや有り	粒子極めて細かい 整穴埋土
5	黄褐色砂	10YR5/6	粘性無し	しまりやや有り	粒子極めて細かい
6	黄褐色砂	2.5Y5/6	粘性強い	しまり強い	

図11. 4号住居址試掘区土倉断面図.

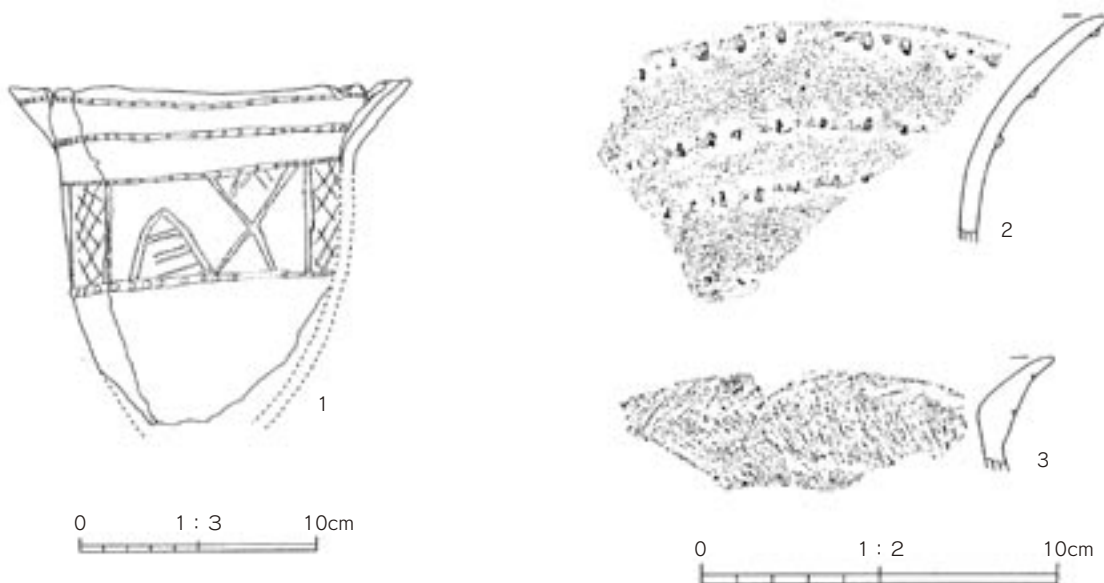


図12. 4号住居址覆土中出土土器.

その出土状況と頭蓋骨に人為的に穿孔した痕跡が認められることから近世アイヌ期の送りに関わる遺構である可能性が高い。面積的に小さな範囲での確認のためそのほかの遺物の共伴の可能性などは不明である。

④第4号住居址

第4号住居址は、径6mを計る。試掘区は、堅穴の窪みの形状と長軸を考慮して、南西隅に1m×2mの規模で設定した。

試掘区は堅穴内部に位置するため土層には住居址の壁は確認できていない(図11)。本住居址からの出土遺物は、住居覆土である3層から小型甕の口縁+胴部の大型破片(完形の3分1)(図12-1)、甕の口縁部破片が2点出土している(図12-2, 3)。

住居の帰属時期は、床面より出土遺物がないため未確認であるが、覆土より出土している土器片がトビニタイI群であることからトビニタイ後半期と見なしてよいであろう。

まとめ

平成16年度の調査では、以久科北海岸遺跡の西側の堅穴I群がトビニタイ文化期の集落を含むことが明らかとなり、また堅穴の窪みを利用したそれ以降の時期、近世アイヌ期の遺構も含むことが確認できた。未確認の堅穴住居も含めて、今後各堅穴の構築時期や集落の変遷過程、遺跡の通時間的な利用の実態の解明を進めたい。

なお、第2号住居址より出土した炭化材、第4号堅穴住居址より出土した炭化材と土器付着炭化

物(内面および外面)については、現在名古屋大学において年代測定を依頼している。

今後の課題として、極めて起伏の大きな砂丘上にいくつかのまとまりを持ち、堅穴群が形成されている本遺跡の特性を測量調査を進める中で明らかにしていく必要がある。堅穴II群は、堅穴I群より東に50mほどの位置に立地しているが、両者の標高差は、大きい。とりわけ堅穴II群においては、堅穴群が標高7mから8mの高さと標高12mから14mの高さの位置に分かれている。

各堅穴の窪みの深さは、30-50cm代が最も多く、70cm代の深い堅穴も存在する。これらの差が時間的な差を示すのかどうかを明らかにする必要がある。

遺跡の位置する砂丘の地形については、トータルステーションによる測量に加えて、北海道大学大学院文学研究科地域システム講座の協力を得て空中・地上両方からのレーザースキャナーによる測量を計画している。

引用文献

- 大西秀之. 1996. トビニタイ土器分布圏における“擦文式土器”の製作者－異系統土器製作技術の受容にみる集団関係－. 古代文化48(5):48-62.
- 山田忍. 1958. 火山噴出物の堆積状態から見た沖積世における北海道火山の火山活動に関する研究. 地団研専報8:40.
- 宮田雄一郎・山口昇一・矢崎清貴. 1988. 5万分の1地質図幅「計根別」及び説明書(地域地質研究報告). 77pp. 地質調査所, 川崎.